

484-1

# 軍艦ノ必無性

著者 坂田 三郎

昭和十三年十二月三十一日発行

彼が陣してゐた都立は、満洲に居て揚子江岸に泊らう  
て南京に攻め入ることになつてゐた。ところが南京  
方面の二日前に突如として命令が來て、「今南京か  
ら多数の支那兵が江蘇省で上流方面へ退却中だから、  
それらの船を全部沈没せよ」と、いふのだ。

そこで直ちに満洲へ引き返し、その江岸の陸上へ  
陸軍砲、野砲、機銃を並べ、幾々一里半におたる砲  
列を布いた。時あたかも満洲下流は千メートルのと  
ころに敵軍兵を乗せた汽船がらしめるの數隻が現れ  
かゝつたから、これに砲撃を加へた。

その船の中に四らずも英軍軍艦があつて、これに  
敵軍砲隊の數隻が命中して沈没になつたといふ話で  
あるが、事實として英軍艦の沈没を果つたに過ぎな  
い。



(英佛蘇と日獨伊の對峙、自由主義連衡と全體主義聯盟との對立は決して單なる對立に留まらず、食ふか食はれるか、生か死かの決闘であり、血みどろの戦ひだ。二大陣營の中間にあつて日和見をしながら甘い汁を吸へるやうな中立地帯はない。白か黒かだ。中ぶらりんでゐる國は踏み躪されてしまふ。

獨伊の結盟は、日本ではゆるる仁義に基いてゐる。ヒットラーとムッソリニは口の先や紙上の約束で協同してゐるのではない。男と男との仁義によつて堅く誓ひ合つてゐるのだ。

若し獨伊のどちらかと仁義外れをやれば、英佛蘇連衡の手で獨も伊も共に打のめさることは明白だ。この兩者は嫌惡なしに仁義を守つて一國となり、積極的な經營の戦法に出るしか途がない。舊秩序に従ふか、新秩序を創り出すか、衰亡か發展か、二途一翼の絶對境に立つてゐる。

日本はすでに防共協定の名によつてこの仁義仲間に入つた以上は仁義を徹底するが男の道であり、生きる道だ。今さら尻込みする手はない。日獨伊協定は防共に限るとか何とかしみつたれを言ふな) 結盟は速かに政治、經濟、文化、軍事の全面にわたり最高度に強化さるべきだ。

# 戦争と平和

欧州では今や国々が立ち上がった。不退縮の勇気  
 持心をもつて互に勝の破砕に取りかゝつた。美佛  
 連盟の民主主義的軍隊維持軍と、伊血民の自  
 主的軍隊新秩序維持軍とは、既に火蓋を切つた。  
 国々の前途は正にあらゆる軍が蒋介石を前衛と  
 する共々ラッパ、赤の抗日軍に對する攻撃を遂行  
 しようとするのと相呼應する史的動向だ。世界新秩序  
 への情熱は燃えだした。

(最も多忙を占めるつゝありとなく、この時とこ  
 ろに、世界の平和と正義の戦いを闘争に導いて仁義を  
 争うべきだ。仁義外れをやればやがては滅亡の運命  
 に向ふのは古今東西を一例として社会人権の示す  
 ところではないか。)

(世間の支配階級を片付かせるためのみにも、抗日の  
 元兇とこれに附随する勢力を叩き出すのに過半  
 の力が必要ではないか。ノー・ノーと直ぐに言ふの  
 は仁義だ。)

(日本が種々事をきかぬとあるため、第一、国  
 家主義のやうなことをやらねば、次は直ぐに美  
 佛連盟が勢力を伸ばし、日本打倒と来る  
 ことは目に見えてゐる。仁義外れをした者がどら  
 く強んでもいゝ子にされる筈はない。第一、国  
 家が叩かれた後には第二の第三の干渉が日本に来るに  
 違ひない。これを防ぐ、いゝを強固に固守す  
 るべきである。第一の最上の方法は、  
 国々の同盟を組織して敵に對することだ。)

5-837

(この前にいって来た「日露戦争の終結は露西に有利な事だ」といふ言ひがあるやうだ。その短見や言ふべしである。)

(言ひていふ如く、我日本の国はロシアに非ずして、米国だ。しかし、日露戦争も亦して国争でない。何かのはずみに日露戦争を起せば、日本としてはソ連一國とのみならず、他の國はみんな中立を待つてくたはるは甚だ都合であるが、そんな甘い工合には行つて行つてくれない。日ソ戦へは米国はソ連に武器その他一切の戦争資材を供給するは協定のこと、経済的にも、外交的にも援ソ制日に全力をあげ、米国は更に増強して日本軍制を試みる位のことには必ずやる。日本としてはソ連とだけ戦ふといふやうなまじい事を見てはいかぬ。相手は必ず我等の一勝と考へねば困る。最近、米ソの間に起された問題は「極東に及ぼす」と、米政府當局が懸念したのは喜んでゐる為政家が日本に有利なやうであるが、その懸や及ぶべからず。)

(傾りに、日ソ戦争となり、米、英が向ふに加はつた場合にも、まさか我日本軍兵がシベリアの戦場へ出かけることはあるまい。たとそれだけの意味で、米ソ同盟は「極東に及ぼす」といふに過ぎない事を道にして、日本が英伊と共に米、日と戦ふにしても、日本軍がライン戦争に立つ必要は餘からう。それだけの意味では、日露戦争も日露は「極東に及ぼす」と言へるだらう。)

ソノの目ざす前途も世界の學問には通ひないが、  
 其に前に意も無く世界の進歩と國民の繁榮を妨  
 げてゐるのは美国だ。『大英帝國の領土上に全く  
 日没することなし』自ら領土の天を越つてゐるの  
 は、彼等が亦も世界の諸民族を臣服、擧束しつゝ、  
 することを自由するに等しい。)

(美国はエニマン・ジャツクの光りを自耀するが、  
 それは「光」でなく、爰は妖靈だ。これを打ち滅ば  
 せば、東洋の平和も世界の新秩序も産れて来ない。)

(時は恰も好し、目下の情勢では英日征伐は易々  
 たるものだ。) 日本は定と居直ればよい。上海を  
 捕く、香港を占るぞと云へばよい。支那で預けれ  
 ば次にはすぐ印度へ火が着くことを英國は知つて  
 ゐる。

二 四

国家は一つの生命體である。無情物ではない。これに一定  
 の指導原理と目標がなければ發展の可能性はない。

日本は、神武天皇の誓詞にある通り、八紘一宇  
 といふ永久不變の指導原理を有してゐる。

三 五

さて現在の日本をつらつら考へてみるに、何處  
 の到達目標も指導原理も存在しない有様である。  
 爲めに、人心は浮動して、遵從する所を知らない  
 状態である

何は爲いても先づこの亂惑せる「家」に一定の目標  
 を與へることが現下第一義的の必要である。



最近における世界の流れは、おぼろげに二つある  
と思ふ。

その一つは、国際同盟の無力化より、今次の歐洲  
戦争に至る間において、いづれの国も全權主義に  
家の性質に移らんとすることである。（自由主義  
の国が、その地位を守らんとすること自身がすで  
に全權主義の國策的な政策を物語るものだ。）

第二の現象は世界のブロック化である。各国が  
自己一己を以てしてはその生存権を確保發展する  
ことができなくなり、幾ヶ国でブロックを形成し  
て政治、経済、国防、文化等により密な協同  
動作を求らうとする傾向になつて來た。

このブロックは近來の國家同盟とは異なり、ブ  
ロック内の國家はその性格までも共にせんとするも  
のである。そして來たるべき世界は、モンロー主  
義の米米ブロック、東洋民族の東洋ブロック、歐  
洲方面のヨーロッパ連盟の三大ブロックに分裂して  
この三者が雌雄を爭ふ時代が來ると思ふ。

（かく世界が全權主義化し、またブロック化する  
ことが近來の趨勢を物語であるとするならば、わ  
が國もまたこの大勢に則つた利益としなくては、  
平衡が保てないのは理の當然である。）

（新潮流の意見） 以上は大體の見地を以てした  
世界の動向であるが）を極第二義的に起こりつゝ  
ある傾向を見のがしてはならぬ。

その一つは国権に對する政治の優越といふことである。(今までの自由主義時代には、国権が政治に先んじ政治を動かして来たけれども、世界が漸次變遷して大衆國に進展するにつれて、国権の優越性が崩れ、主権國權の邊で、政治が先に立ち、国権は政治に倅はなくしては國家生命體の活動が出来ないことになつて来た。)

なほ一つの重要な傾向は、国権において、從來金の優越性に代つて、物と人とが經濟的地位を占めるに至つたことである。従つて、国権の場面では、從來の金融支配に代り、將來は企業の支配時代に参らねばならぬといふ傾向を呈してゐる。

以上の如き、第一義的動向と第二義的傾向とを、取つてもつて来るべき日本國家命運の基調とすべきである。

### 三八

日本の國際的地位を造るために、差出となるべきは日獨英アロツクである。

この日獨英アロツクは、歐外國に對する關係において少くとも日獨英三國の生存權を完全に確保するだけの形勢と實力を持たねばならぬ。そのためには、日獨英アロツクが單なる政治的結合では意味をなさぬ。政治的結合に加ふるに亞國なる經濟的結合をもつてして、始めて生存權確保の機能を發揮し得るのである。



この点より、日米ブロックは近衛政権に重  
ふべきなく、完全な新秩序のなせるブロックでなけ  
ればならぬ。新秩序とはすなはち舊来の米米ソ  
等による旧秩序の正統的継承を意味する。

従つて米米ソ等には決して米米ソ等であつてはな  
らぬ。そして米米ソ等に勝つといふ以上は尤も條  
約の門戸開放、機會均等を無條件に許さずといふ  
ことになる道理である。つまり日米文の生存権の  
争奪にあらぬ他國にあつてのみ、米米ソ等に門戸  
を開放すればよいのである。

(かくの如く米米ソ等の主張を規定することに  
よりして、我々の主張が立てられて来る。)

(即ち) 舊秩序一掃とは、米米の東亞排他勢力  
とソ等の東亞赤化及び露米同盟の實現とになる  
のであるが、差し當りは舊秩序の中核たる米國を  
打倒するため、我々の外交は一時ソ等と手を結  
ぶことをも考へるわけである。

## 一四二

諸外國は支那事變の發端から日本の行動を快く  
思はず、種々の形式で日本に通を行つたが、これ  
までは各國の足並が揃つて居らず、個別前を反日  
行動を繰返したに過ぎなかつた。ところが今日で  
は、それらの諸外國が日本に對して連絡を  
取つて立つた。即ちコロンス事件、ノモンハン事  
件、日米露協商締結廢棄事件、それに日英會商など  
の事實を正視すれば、米米ソ等の諸國は手を廻り、  
一つの戰線をなして日本を壓迫せんとしてゐる  
ことは疑ふ餘地がない。

露田包圍戦の歴史的功績に立つのは英を先頭とする露軍の行動が主なるに先んじて、首魁の英に一大打撃を加へるのには、他の進軍者を辟易させる方法だ。英が口ずかすは米だつてのを張り思はしをい。若しそれでも米が出て来れば各領土の法で米を叩くのは容易である。かりしたやり方が、日本の島嶼を確保する唯一無二の方法である。

六二

しかも、現在の欧州情勢に信みると、日本にとつて今ほど好いチャンスはない。欧州戦争時のやうに十三対一とか四対一とかいふやうな孤立状態ではない。手にして、欧州の諸領二大國が血闘の手を差しのべてゐる。奥陸大日本を創るが吾等の願ひである。今こそ、やればやれる時機である。

六四

欧州の大國も獨逸の英領に對する現状打撃、新露野戦の戦ひであり、又支那事變もアジヤに於ける英米の支那に對する日本及び支那民族の標的の戦ひであることは今更云ふまでもない。寧ろ三皇の現實より見れば日本及び清伊等は既に英米に對しての戦ひを遂行しつゝあるのである。此の事實を直ちに吞食するものが、英米傲容である。

六一一六二

支那事變を英米と協力するのでなければ解決出来ないと判断するそのことが、永久に事變を解決せないのである。英米を支那より離脱するといふ方針を立てた瞬間に於て、支那は新しき秩序に向つて動き始めるのである。獨逸と協同戦線を結ぶと云ふ覚悟をきめるならば、直ちに歐洲の事態も一變するのである。(何時までも英獨が戦つて欲しいと望みをしてゐるなれば、歐洲戦争は素外早く片付くかも知れぬ。) 英米依存の態度を一擲して、日清支ブロックに於て自給自足經濟を建設すると云ふ方針を確定した場合に、始めて英米に依存せざる軍備生産力の増充の具體的計畫も立ち得るのである。(政府は親英米より脱却せる意圖の下に、經濟的具體策の研究立案をした事があるかどうか。) 英米を失ふけれど、歐洲支那或は南洋は我がものとなる。

七三―七四

銃後も戦場だ。戦線は全國民の全力を盡してゐる國家總力戦の前戦だ。戦場と銃後とが戦時體制にならねば必勝を期し得ない。支那事變の完遂は武力戦と共に建設戦だ。之が爲には、經濟産業人も知識階級も凡ゆる國民が、戦場にある覺悟でやるべきだ。

八六

## 自由主義を迫撃せよ

獨逸は現状打破を欲し、英佛は現状維持を有利とすることは明白なる事實である。

その動立が現在の歐洲戦争を生んだから、歐洲戰は新舊秩序の戦ひと見られるが、これを思想的に見れば、自由主義と全體主義との争ひである。

面白いことには、自由主義の擁護者として奮起した英國が、戦闘力を強めるために、かなり強度の經濟統制を行つてゐる。フランスも共産黨に大壓迫を加へて自由の傳統を放棄した。つまり從來の自由主義至上方針の國が自由主義を守らんとし、て戦ひながら、知らず知らずのまに全體主義國家に變形しつゝある點は、興味深き現象であり、全體主義思想の勝利を宣言するに等しい。

九九

## 民族の試練

既に世界大轉換の指向は決定した。即ち外は世界新秩序の建設、内は國家新體制の確立である。すなわち、(この大勢は世界歴史の大潮流として鐵則付けられたものである。而して、)この大潮流は到底人爲を以てせき止めんとして、せき止め得るものではない。

(顧みれば第一次歐洲戦争後、第二次歐洲戦争の勃發を抑制すべく各國共絶大の努力を拂つたが、來たるべきものは來たではないか。

日支事變當初に於て事變の巨大を極力避けんとしたが、事變は滔々として滔々の一途をたどり、最早事變の波紋は米國であるまでに達したではないか。日獨同盟も必其の急なるを許せられて既に二ケ年、各種の阻止運動が試みられたが、遂に今日に於ては何等の疑問の存する餘地なく、その成立を見たではないか。滿洲事變以來、國家章音は其の道を辿つたけれども、今や常軌の如く新時代の叫びは津々浦々にまで届いたではないか。)

(新しくこじ来れぬ歴史は人が作ることもなく、環境が作ることもなく、神が創るが如くその向はざるべからざる道程は、何等の躊躇なく斜坡に石が落ちるが如く加速度を以て進み来つてゐる。之れをその時代に生存せる者より見れば、遅々として、その進行の速きに慄慄を感ずるが、歴史の過程より見れば實に急速度の増化である。)

(而して、その歴史の支障となるものは、歴史の移行を正當に洞察し、之れに先んじて歴史の移行を力によつて押し進めんと死力を盡して、努力したるものの手に歸すべきは、これ又歴史の證明する處である。)

(讀者！歴史の先を行け！歴史を作れ！)

(この度、) 日清同盟が世界歴史の舞臺の  
幕前に於て開演せられた。(世界歴史舞臺を最後  
的に決定付けた事に於て、) 歴史的に意義は深刻  
重大である。清は世界舞臺の指揮權を我が日清同  
盟に譲らしめた。第二幕目の役を我が天朝民衆に  
演らしめた。清室の加担何ぞ深きや。)

睡をさるはソレとの外交舞臺である。その  
成るの日は世界舞臺の日である。

(切に、日清同盟天朝天下の利益を望むもので  
ある。)

(日清同盟の意義の重大なるは前篇の通りであ  
るが、今の篇その同盟は一の舞文に過ぎない。  
條約の締結によりて妥協されれば、條約は死文である。  
本條約を適用文にしてこそ世界の動、日本の動は  
なるべきである。この條約の實行に於て決定せさ  
るべきからざる要事なる事項は天朝王族樂國の確  
立と、これを防衛すべき英米英に米臣に對する強  
國なる態度の決定である。未だ英米に對する勇烈  
なる態度の決定に躊躇しむるやの處あるも、早  
く必ずや米臣に對し強烈なる態度に出でざるべ  
からざるに在るべきは火を見るより明かである。  
支那事變當初に於て、徹底的態度を採る事に躊躇  
せし英臣が遂には、ビルマ・ルートまで其手  
を延ばさざるべからざるに至りしと回想、この度



も、米穀を運搬せざるべからざるに至るべきは  
當然にして、寧ろ以來往を依きし對支政策が甚  
變を要延かしめたる事に思ひを致せば、この際  
予果目的に米穀運搬を決する事こそ、世界秩序の  
信を固るべきと云ふべきである。）

（この決心の定まる事によつて、初めて共榮國は  
樹立せられ、その樹立は自ら支那に交戦権を推  
せしと同様の結果となり、支那と連環體を組  
し、前進しては支那をして世界秩序の旗に染  
ざるべからざるの地位なきに至らしめ、支那事  
の世界果敢目的が遂げられべきである。一に事  
解決のキーは、我が國の運搬なる米穀運搬に  
ある。）

（かくつて三内情勢を見るに、）日支事變既に  
三ヶ年、（日家の一時優勢に成らんとして未  
だ成らず、生計方益すしも増せず、物資需給未  
だ円滑ならず、日民受ける最なる飢饉の惨憺を嘗  
めつゝも糧食完結のため、自己の生活犠牲とし、  
皇軍府政の活動に一貫せしめんとしつゝあるの有様  
は、實に自國の命懸けに成るものなり）今後尚以上に  
日支の事變を要求せざるべからざるの懸念に難くな  
り。（日支の事變が佳勢と三内の運送状況は廿一日  
と急進、日支を告げ、近き將來に於て、吾人が今  
日要求せる以上の内地の運送を招來し、日民は急

後、巨匠の如く、一天機を授くるに値り、抑ゆ  
て無土より立ち上らざるべからざるに、機を喰ひな  
く獲得するに値り、五三も金三も聞え、直隸人も、  
自主主義も、自治保持も、外人も若人も、男も  
女も子孫も、世界の一二となつて、巨匠に殉ぜざ  
るべからざるの時に必ずや至るべく、その時  
は直隸人も直るであらう。(この時こそ、恰も  
一機が巨匠の手機を喰ひたる如く、陸々と立ち上  
るが如く、天、天機をの五三の中に一道の光を  
見たるが如く、直も一六三に陥るであら  
う。

一一三

世界は新舊秩序の二天分岐に分れ、いま正に巨  
匠中である。而して、日本は中立ではないのだ。  
(支那事変の進行を以てしても明かなく、已然と  
して新秩序の世に立つて巨匠中である。) 吾人の  
前途は、勿論、旧秩序の未来である。この世かな  
る理由を巨匠探問たるものとなし、巨匠として、  
未来に立つる巨匠探問を巨匠し、巨匠米國に對  
し、巨匠なる巨匠を以て巨匠し、巨匠の巨匠を求めん  
として巨匠たる巨匠。(巨匠と巨匠までならう  
か。然るに、米國は巨匠巨匠により日本の新秩序  
を巨匠せしめべく、巨匠としてその巨匠を巨匠めつ  
つたるは、もはや巨匠べからざる巨匠である。巨匠  
巨匠、巨匠の巨匠巨匠を巨匠めつたるは、) ま

一三〇—一三一

1186-17

ことに奇三千兩と云ふにはならぬ。如何なる形を  
とるかは何とすも、日米の信託はすでに必然の  
勢ひにある。(彼らに偽造の紙を弄して進むこと  
は出来ずしてちり紙に過ぎ、彼らは知らぬにさる  
の偽造に阻れる事し、いまだして誤かである。  
立ち止まるに面して、やがて待たんとする  
時は、うでに巻く、三三三の極に達したる状態に  
あつては何事をも期待しない。) 育しろ、人  
で、立ち止まるの時に立ち、南方赤松に確立し、  
(ちり紙を偽造に阻止するの爲に出づべきである。)  
(吾人は、この山、頂をかき出し、参するやと  
云ふ、) 虎穴に入りてこそ虎児を尋るの方向を以  
て進むべきである。

一三一

徳川幕府以来百年、内政の情勢は、文字通り重  
大なる時を経てゐる。その山々、時の趨勢は  
二千六百一年の巨年であると言つて憚らぬ。

一三五